

健康文化

「21世紀の熱帯林業」を考える タイでの国際会議に参加して

北川 勝弘

1 はじめに

近年、地球規模での環境問題の一つとして、熱帯降雨林の減少問題が国際的に大きな問題となっているが、そうした問題に関心を持つ者にとっては実にタイミングのよいことに、昨年（1996年）の11月25～29日に、タイのカセサート大学（バンコク市）で「21世紀の熱帯林業」をテーマとする国際会議が開催された。この会議は、カセサート大学林学部が昨年、創立60周年を迎えたことから、タイにおける林学教育開始60周年を記念することと併せて、タイ王室林野局創立100周年、タイ国王在位50周年を記念する趣旨で計画されたものだという。会議の略称が「FORTROP'96」と名づけられたのは、「1996年に行われる熱帯林業の会議」という意味をこめたものと思われる。

筆者は、カセサート大学林学部にいる数人の知人たち（いずれも、この国際会議の運営責任者）と久しぶりに再会し、旧交を温めることも自分なりの目的のひとつに加えて、このFORTROP'96に参加した。さらに、会議の後で12月3日まで5日間におわたって行われたタイ北部の山岳林地帯への見学旅行にも参加し、熱帯降雨林に間近に触れる機会を持った。筆者にとって、タイ国内の訪問は初めての体験だったので、見聞した事柄のそれぞれが大変興味深かった。

本稿では、FORTROP'96国際会議の模様と、タイ北部山岳林の見学旅行で見聞した事柄の一端について、書きとめておきたい。

2 FORTROP'96 国際会議

今回のFORTROP'96の会場となったカセサート大学は、タイの首都バンコクにある名門の国立大学のひとつであり、「カセ」とは「農業」、「サート」とは「学問」を意味するのだと、ある日本人の友人が教えてくれた。すなわち、タイで唯一の「農科大学」であり、私の所属する名古屋大学農学部とは大学間交流協定を結んでいる間柄である。

さて、今回のFORTROP'96には、熱帯林に関心を持つ研究者、教育者、およ

び各国政府機関や民間の森林管理業務の関係者たちが、33カ国から500名を越す規模で参加した。開会式の冒頭に、タイ王室のチュラポーン王女が「タイの医薬用植物から抽出された生体に作用を及ぼす種々の物質」と題する基調講演を、流暢な英語で行った。マラリアに効能をもつ薬物の単離研究例などを具体的に紹介し、医薬品の産出を始めとする熱帯林の多様な重要性を強調したもので、形式的な歓迎挨拶にとどまらない格調の高い報告内容に、多くの参加者が感銘を受けた。聞けば、同王女は日本のさる大学の薬学部に留学して博士学位まで取得した、非常に学究肌の方なのだそうである。とても小柄でスリムな方で、年齢はおそらく30歳代前半であろうとお見受けした。

FORTROP'96の会議は、連日参加者全体を対象として行われた午前と午後一人ずつの特別講演(計5名)と、「熱帯アジアにおける林業教育」などをテーマとした数種類のパネルディスカッション、10会場で分散して行われたシンポジウム、およびポスター・セッションの4本立てで構成されていた。研究発表件数は、シンポジウムでの口頭発表が計110数件、それにポスター・セッションでの発表が50件以上もあり、総計すると170件近い数にのぼった。

各シンポジウムのテーマとおおよその発表件数(括弧内の数字)は、以下の通りである。(1)熱帯に関わる地球の変化(24)、(2)民族生物学(未開民族の生活諸方式とその生物環境の関係を調べる学問領域)(17)、(3)バイオテクノロジーと森林再生(23)、(4)公園および保護地域(15)、(5)未来の流域管理(20)、(6)共同体林業/農作林業(11)、(7)林産物利用(19)、(8)リモートセンシング(13)、(9)マングローブ生態系(12)、(10)AFSA(アセアン(東南アジア諸国連合)内の林学系学生連合)の会議(11月21~29日)。

筆者は、森林利用学・林業工学を専門としているが、今回の会議では森林の伐採・搬出技術に関する工学分野の分科会が設けられていなかったため、「(5)未来の流域管理」のシンポジウムに参加し、わが国で開発した新しい林道建設工法の森林環境保全上での有効性について報告した。

会議全体として、日本からの参加者は少なくとも60名くらいはいたようで、シンポジウムでの発表者が22名(全体の2割)を数え、座長をつとめた方は8名もいて、その人数の多さに大変びっくりした。現在、東南アジア各地の熱帯降雨林地帯で、大学院生を含めてたくさんの日本人研究者が調査・研究を行っていることが、そうした参加者数の多さからもうかがわれて、心強く感じた。

3 「21世紀の熱帯林業」に向けて

「21世紀の熱帯林業」に向けて、私たちは一体どうすべきかという問題に

ついて、今回の5日間の国際会議では、どのように意見集約がなされたのだろうか？この問いについて考えるには、何といても、参加者全体向けの5名による特別講演の内容と閉会式で採択された FORTROP'96 声明文とを総合してみるのが、最も適切であろう。

5名の特別講演の題目は、次の通りである。(1)21世紀の熱帯林業研究・教育に向けての努力目標と好機、(2)熱帯保護林管理のための科学、(3)熱帯における栽培林業、(4)熱帯における木材利用、(5)熱帯における土地利用。これらの講演中で述べられた主要な論点は、閉会式で採択された FORTROP'96 声明文のなかに盛り込まれているので、以下に FORTROP'96 声明文について紹介する。

FORTROP'96 声明文では、熱帯林の保全や管理、利用を行えば、それらは必ず何らかの地球の変化に結びつくので、次の5項目の事柄について政府や諸機関、および個人の注意を喚起することが重要である、と指摘している。

(1) 熱帯林とそこにある樹木は、生物学的な種の多様性の維持や、炭素循環などの過程に関して、地球規模の重要な機能をもっている。また、持続的な農業生産の保証や、水の供給調節、あるいは住民への物質的、非物質的な便益の供給を通じて、個人や共同体、企業、ひいては諸国の安寧を支えている。したがって、森林の管理を行う際には、単に個々の産物の供給のみを考えるのではなく、複雑な熱帯の生態系についてよく理解し、より良い状態を保つように努めるべきである。

(2) 熱帯林とそこにある樹木に関する長期計画をたてる場合には、今までの事情の如何よりも、国家や地方(自治体)の開発優先権について、もっと斟酌しなければならない。そして、森林資源の保全や管理、および利用に関わる国際的な責務についても、できる限り考慮しなければならない。

(3) 21世紀に向けての新しい熱帯林管理モデルを開発し、適用する場合には、熱帯林とそこにある樹木についての既存の伝統的な知識と、過去100年以上の長期間にわたって蓄積されてきた、森林管理や科学的な熱帯林業の研究に基づく経験とを、十分に活用することが、最も重要である。

(4) 森林研究と林業教育は、国家目標として承認された国の森林政策と林業計画がうまく適用・発展しうるよう、強力に支援すべきである。

(5) 熱帯諸国では、森林研究と林業教育についての各国の能力を、国際的な支援機構や、地域的もしくは他の国際的なレベルでの関係機関同士の協力を最大限に利用するばかりでなく、(国内にいる)活用しうる全ての人的資源をより良く調整・活用することにより、強化すべきである。

以上の項目のなかで、国家の役割が大変強調されていることに違和感を覚え

た読者もおられることと思う。それは、熱帯降雨林をかかえる発展途上国の多くで、国から木材伐採権を購入契約した企業が、国の森林計画制度や木材伐採方法等に関する諸規程を無視し、契約した伐採量を大幅に超えた違法な伐採を長期間にわたって頻発させるという、発展途上国に共通した悩みを抱えているためである。

紙数の都合で、ここで詳しく触れている余裕がないが、「21世紀の熱帯林業」に対して私たちが先ずなすべきことは、熱帯降雨林の実態について、できる限り正確な理解を深めることだと思う。そのうえで技術的、もしくは社会経済的、政策的に対応すべき課題は、言わば無数にあるはずである。

4 タイ北部山岳林の見学旅行

会議後のタイ北部山岳林の見学旅行に参加する一行は、11月29日の早朝5時にホテルのロビーへ集合し、寝ぼけ眼（まなこ）でバスに乗り込み、バンコク空港に向かった。バンコク空港からタイ北部の大都市チェンマイに飛ぶ飛行機は、午前7時発なのだが、悪名高いバンコク市内の交通大渋滞に巻き込まれないため、バスのホテル発時間を2時間も前にしたのだという。チェンマイまでの飛行時間は正味1時間であった。

見学旅行の初日、チェンマイ飛行場からバスで40分ほどのところにあるカセサート大学演習林に向かい、演習林内の丘陵地に成立している常緑広葉樹林を見学した。その常緑広葉樹林は、確かに日本で見かける照葉樹林と雰囲気似通っていると感じた。その昔、中尾佐助博士が提唱した「照葉樹林文化論」の証拠の一端に、そこで実際に触れることができ、感慨深いものがあった。

2日目の午前中、ランパンという町に比較的近いところにある、カセサート大学が管理しているという、象の訓練センターを見学した。ここで、筆者は生まれて初めて象に乗った。10分ほどの時間であったが、上下方向の軽い振動を受けながら、センターの訓練場内をゆっくり一周した。象の背中が大変高いこと、つまり象がとても大きいという当たり前のことを、改めて実感した。

タイ王室林野局では、現在、チークの植林に大変力を入れている。単一樹種の大面積一斉造林をすれば、日本でも例があるが、必ず病虫害が発生する。見学旅行の途中で立ち寄った、チーク林の病虫害対策を任務とする研究センターでは、防除方法を確立するための研究が、30歳くらいの女性研究者を中心として、精力的に行われていた。生まれて間もない赤ちゃんを脇の男性に預けて、自分たちで工夫して編み出した病虫害防除法について、スライドやOHPを使って丁寧に、そして熱心に説明してくれた若いお母ちゃん研究者の、人なつ

こい笑顔が印象的であった。

(1997.1.19 記)

(名古屋大学農学部助教授・資源生物環境学科)